海外ニュース

ドイツにおけるインド学仏教学研究の現状

――在外研究の経験から――

DASH Shobha Rani

はじめに

筆者は、大谷大学二〇一七年度在外研究員として、二〇一七年四月一日～二〇一八年三月三十一日までの間、ドイツのハンブルク大学およびハイデルベルク大学に所属し、研究を行なった。ハンブルク大学においては、当大学のアジア・アフリカ研究所インド・チベット学科（Asien-Afrika-Institut, Kultur und Geschichte Indiens und Tibets）に付属する沼田仏教学研究センター（Das Numata Zentrum für Buddhismuskunde der Universität Hamburg）[1]の客員教授研究員（Guest Professor Research Fellow）として、ハイデルベルク大学においては、当大学の南アジア研究所、南アジアの文化および宗教歴史学の学科〈古典インド学科〉（Südasien-Institut, Kultur und Religions Geschichte Südasiens〈Klassische Indologie〉）[2]の客員教授として所属し、研究活動をした。ハンブルク大学での受け入れ研究者はProf. Dr. Michael Zimmermannであり、ハイデルベルク大学での受け入れ研究者はProf. Dr. Ute Hüskenであった。在外研究の研究テーマは「大乗仏教に見られる女人出家と女人救済の思想的展開の研究」であった。

当初は、ハンブルク大学のみに留学することを許可していただいていたが、諸事情により、ハンブルク大学およびハイデルベルク大学両方に所属し、在外研究を行なうことになった。

在外研究の主要な研究活動及び研究成果は「在外研究報告書」という形で大谷大学に提出済みである。インド学・仏教学に関するいくつかの情報、研究動向などを以下に紹介し皆さんと共有したいと思う。

ハイデルベルク大学におけるインド学・仏教学の教育・研究

当大学の南アジア研究所（Südasien-Institut, 通称 SAI）は古典インド学と現代インド学を結ぶ学際的な教育兼研究組織である。一九六二年の設立以来、インドを中心とした南アジア全体の教育・研究に力を注いでいる。歴史学、経済学、政治学、地理学、人類学、現代南アジア言語と文献学、南アジアの文化と宗教歴史学という七つの学科から構成されている。上記のように筆者が所属したのは南アジアの文化および宗教歴史学の学科（Kultur und Religions Geschichte Südasiens）であった。筆者は二〇〇七年から客員教授として当学科に数回訪問し、講演や共同研究などを行なっている。二〇〇七年に最初訪問した時には、古典インド学科（Klassische Indologie）であったが、現在は両方の名称が使われている。ただし、研究内容からすれば、現代南アジア言語と文献学科（Neusprachliche Südasienstudien）は現代インド学を中心とし、南アジアの文化および宗教歴史学の学科（古典インド学科）は古典インド学と仏教学を中心とした教育・研究を行っている。

この学科の学科主任の Ute Hüsken 教授は二〇一七年四月に就任したばかりであった。Hüsken 教授はパーリ比丘尼律の専門家であるが、現在、研究分野をヒンドゥー教にまで広げ、バラモン職の女性（female Brahmin priest）やヒンドゥー教の儀礼に見られる女性像などを含む「女性と宗教」をテーマとする研究をされている。筆者がこの大学に到着したのとほぼ同時期に就任されたため、まだ多くの業績はないが、将来が期待される研究者である。

Hüsken 教授の前任者は古典インド学、ネパール学、儀礼研究などで有名な Axel Michaels 教授であった。Michaels 教授は古典インド学科のベテラン研究者であり、数々の業績を残されている。教授は、十数年前からネパール学に力を注ぎ、「Documents on the History of Religion and Law in Pre-modern Nepal」という課題名の膨大な研究プロジェクトの代表者を務めておられる。詳細については https://www.haw.uni-heidelberg.de/forschung/forschungsstellen/nepal/projekt.de.html を参照されたい。

ハイデルベルク大学付属の Cluster of Excellence: Asia and Europe in a Global Context という研究プロジェクトが中心である組織の仏教学の担当教授に Michael Radich 教授が二〇一七年末に就任された。Radich 教授はインド仏教の専門家であるが、現在漢訳仏典を中心とした研究もしておられる。

このようにして、在外期間中にハイデルベルク大学では人事の大きな動きがあり、これからの仏教学の研究が期待されるであろう。

※リポジトリ非公開

ハイデルベルク大学古典インド学科の同僚たちとクリスマスを祝う。筆者の左からは Hüsken 教授、Dr. M. Maithrimurthi, Dr. Anand Mishra, ケンブリッジ大学の Dr. Valeria Gozizova 及び自由研究者である Stuart Lachs 氏

ハンブルク大学におけるインド学・仏教学の教育・研究

ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所インド・チベット学科（Asien-Afrika-Institut, Kultur und Geschichte Indiens

und Tibets）とそこに付属する沼田仏教学研究センター（*Das Numata Zentrum für Buddhismuskunde der Universität Hamburg*）ではインド学仏教学の教育・研究が主として行われている。インド・チベット学科では三人の教授―Haruna-ga Isaacson 教授、Michael Zimmermann 教授、Dorji Wangchuk 教授がそれぞれインド学、仏教学、チベット学を中心として教育・研究に携わっておられる。なお、私の滞在期間にEva Wilden 教授は新しく就任され、現代インド学とりわけタミル文学研究および写本研究を担当されている。沼田仏教学研究センターの方では、Zimmermann 教授とSteffen Döll 教授が共同センター長としてそれぞれインド仏教と日本仏教を担当されている。

※リポジトリ非公開

Spoken Sanskrit Course のポスター
（SAI 古典インド学科提供）

Spoken Sanskrit コース

両大学においてサンスクリット語会話コース（Spoken Sanskrit Course）が実施されていた。ハイデルベルク大学においては、以前滞在していた時には夏季休暇期間中に一ヶ月間の集中講座があったが、今回は諸事情により、サンス

クリット語会話集中コース（Spoken Sanskrit: A Crash Course）のコース名のもと、二〇一七年六月六日～十六日にかけて授業が行われた。短期間ではあったが、毎日朝9時から夕方5時まで集中的に実施された。

担当講師は伝統あるインド・ベナレス・ヒンドゥー大学（Benares Hindu University）サンスクリット語学科のGopabandhu Mishra教授であった。

初級レベルのサンスクリット文法を用いてどのように会話ができるかが工夫されている。在外研究中にベナレス・ヒンドゥー大学でも招聘講演を行い、その際、多くの研究者と会うことができた。その折に、上記のMishra教授を含む多くの研究者（学生も含む）たちは電話でもサンスクリットで話すようにされていて、電話がかかる度にインドで普通言う言葉「hello!」の代わりに「namo namaḥ」で会話を始めていた。その理由を尋ねると、少しだけでもサンスクリットを発言することにより、サンスクリットに親しんでもらうためであることであった。古代インドにおいてサンスクリットは知識人たちにとっての口語でもあったのだから、現代でも少し工夫することによってそれを実践できるのではないかと考えてのことである。会話ができなくても、文献研究をするには問題がないではないかとの筆者の問に、「サンスクリットはなぜか非常に理解し難い言語であるという偏見がある。話すことによりそれに親しむことができると、サンスクリットへのその偏見が徐々に消えて、楽しく勉強をすることができるようになる。その結果、より正確でリラックスした精神で文献解読ができることに繋がる」との説明がなされた。

※リポジトリ非公開

Spoken Sanskrit Courseの授業風景
（SAI古典インド学科提供）

恐らくこのような考え方がこれからのヨーロッパのサンスクリット研究にも影響を与えていくものと思われる。3年ほど前ハイデルベルク大学に滞在していた時に、インド文化庁（The Indian Council for Cultural Relations）とハイデルベルク大学古典インド学科は共同で「Saraswati Sanskrit Prize」（サラスヴァティー・サンスクリット賞）を設置し、毎年定期的に大会が行われている。ある定められた課題について応募者はサンスクリットでスピーチと質疑応答をすることになっている。ヨーロッパのいずれかの大学に所属している学生にのみ応募資格がある。

筆者もハイデルベルク大学のそのSpoken Sanskritコースを正規に受講し、合格証明書を獲得した。その経験を生かして、自分自身の研究や学生たちの教育にも役立てたい。

Spoken Sanskritはドイツだけではなく、ヨーロッパのその他の大学にも人気のある講座として行われている。サンスクリットだけではなく、インド学仏教学に関する、会話中心の諸言語講座も設けられている。例えば、ネパール語、ベンガル語、ウルドゥー語などの会話講座もハイデルベルク大学で頻繁に開かれている。これらの講座はほとんどが夏季休暇期間を効率よく利用して行われる。教員、学生共に、夏季休暇期間中の楽しみの一つにしている様子であった。

※リポジトリ非公開

Spoken Sanskrit Courseの合格証明書

※リポジトリ非公開

テキストとコンテキスト

ハンブルク大学もハイデルベルク大学も、インド学・仏教学における数々の著名な文献学者が活躍する大学としてよく知られている。しかし、過去十数年の傾向として、文献学とフィールドワークの一体化した研究と教育が行われていることが注目される。筆者には「Text and Context is the Best」のようなポリシーが好まれているように思われる。二〇一七年度は、ハイデルベルク大学とヴュルツブルク大学の共同企画として「ベナレスにおける生きたサンスクリット文化」という題名のもとに、約一か月のいわゆる「ベナレス研修」が行われた。サンスクリットは、文字や言語の「文献学」だけに留まらず、それが現在文化の中でどのように生きているのかを学ぶ、体験主体の学習・研究方法である。インドのヒンドゥー文化の伝統が受け継がれているベナレスを滞在地とし、サンスクリットでの会話、ヒンドゥーの通過儀礼、巡礼、祭りや人々の日常生活などを観察し、「サンスクリットという言語」ではなく「サンスクリットという文化」

を教員と学生が共に学習していることが、非常に興味深かった。

共同研究プロジェクト

「初期仏教における著名な女性たちの評伝」（Hagiographies of Eminent Women in Early Buddhism）という題名の、ハイデルベルク大学所属学科（古典インド学科）の研究プロジェクトの共同研究者として、筆者は5年間参加することになっている（http://www.sai.uni-heidelberg.de/abt/IND/mitarbeiter/shobha/shobha.php 参照）。

本研究プロジェクトの内容は、パーリ語、サンスクリット、漢訳仏典およびチベット語仏典を一次資料として用い、初期仏教時代の女性像を描くことである。本プロジェクトに関わることが、新たな研究課題を発見し、新たな研究者たちとのネットワークを築き上げることに役立ち、今回の在外研究の意義を明らかにするであろうと思う。

※リポジトリ非公開

シュミットハウゼンご夫妻。先生の邸宅にて。

おわりに

在外研究中に数多くの研究者と交流を深めることが出来た。カリフォルニア大学バークレー校南アジア東南アジア学科主任の Alexander von Rospatt 教授やフライブルク大学名誉教授の Oskar von Hinüber 教授と面会し懇談できたことは予想外の収穫であった。Rospatt 教授はもともとシュミットハウゼン教授の直弟子であり、唯識思想を中心とした研究をなされてきたが、近年はネパール密教の儀礼

的な側面を中心に研究をなされている。ハンブルク大学名誉教授で、大谷大学でも度々講演をなされたLambert Schmithausen教授と数回会うことができ、筆者自身の研究に関する話を聞いていただき、ご指導を得たことは非常に貴重な得難い機会であったと思っている。

日本において主流である文献学の視点から見れば、Spoken Sanskritのような会話中心の教育の必要性は認められないかもしれない。しかし、ある言語を声にだして語る時、その言語により近づき親しむことができることを実感し得た。これからは、学生たちに、パーリ語およびサンスクリットは「死語」ではなく、自ら話してみることによって「生語」になるということを体験させ、「サンスクリットやパーリ語は難しい」という固定観念を打ち破り「楽しい」という気持ちに転換させるような工夫をしていきたいと思っている。

ドイツ滞在の期間に、インド学仏教学研究者の間に、ドイツにおいて長い伝統のある文献学の研究と同時に、この数年の間に、儀礼、祭祀などの研究も次第に関心がもたれるようになってきたとの印象を受けた。しかし、それはフィールドワークのみに基づいた研究ではなく、その背景や儀礼文などを文献学の視点から確認されつつ行われており、コンテキストからテキストの研究という研究方法であると言えるであろう。

研究者だけではなく、一般家庭の80歳の女性の方からも学ぶことができた。ホストファミリーのUschi Huch氏に筆者の研究について聞かれ、仏教における「五障」の話を簡単に説明すると、「Hmm……仏教は五障か！キリスト教

※リポジトリ非公開

ホストファミリーのUschi Huh氏と
ご主人のHermann Huh氏

に基づいた我々の文化には女性に関して〈3K〉の義務があるのよ！」と言われた。3Kとは、Kinder（子供）、Kochen（調理）、Kirche（教会）のことである。女性には子供を産み育てるという義務、家族のために調理する義務、そして育児に炊事に多忙な中でもどうにかして時間を作り、家族の健康と多幸を祈るために教会へ行くと共に、教会への奉仕もするという社会的、宗教的義務が求められるとのことである。それを聞いて、筆者は、女性を巡る様々な考えや問題点は仏教だけのものではないことを知らされた。観点は異なるものの、他の宗教の思想や文化の中にも女性を巡る様々な考えが見られ、それゆえ、「女性と仏教」の問題を考える時には、視野を広げて「女性と宗教」という問題として比較検討する必要があることに気付かされた。

註

（1）　https://www.buddhismuskunde.uni-hamburg.de/en.html 参照。

（2）　http://www.sai.uni-heidelberg.de/abt/IND/index.php 参照。